

## 茨城大学

訪問調査対象 プログラム名	東南アジアの大学生との相互理解を目指した海外派遣プログラム（ブルネイ・ダルサラーム大学短期語学・文化研修）
類 型	語学習得型・フィールドワーク型×選択型

### A. 海外プログラムの詳細

#### 【要旨】

- ▶ ブルネイ・ダルサラーム大学（ブルネイ）で、世界各地で話される多種多様な英語はすべて同じ“英語”だと考える「World Englishes」を学び、派遣先大学の学生と共に多彩なフィールドトリップや交流を実施する。無学年かつ教養科目としての海外プログラムである。
- ▶ 本プログラムの最大の特徴は、帰国後の学生レポートを単行本にまとめて市販することであり、市販に耐えうるクオリティに仕上げるミッションを科すことで、振り返りのクオリティを高めている点である。

#### 1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

##### 海外プログラム個別の教育目標が明確である

本プログラム開設のきっかけは、ブルネイ文化を理解するための8月の4週間を使った既存のプログラムに参加しないかというブルネイ・ダルサラーム大学（ブルネイ、以下 UBD）からの働きかけであった。しかしその期間は茨城大学の定期試験期間と重なるために断らざるを得なかったが、茨城大学生向けの英語プログラムの集中講座を開講してはどうかとの代案が示され、その代案を採用したことが本プログラム開設のきっかけである。

プログラムの核は英語力を伸ばすことであるが、せっかくブルネイに派遣するのであれば、普段は接する機会が少ないイスラム教を中心としたブルネイ文化や社会についても学べるようにしようと本プログラムが開設された。また英語については、国際語としての英語、いわゆる World Englishes を学ぶ。教育目標は以下の通り。

1. 多種多様な英語変種は対等な立場であると考え、World Englishes への理解を促し、国際コミュニケーションの手段としての英語能力の向上を目指す。達成目標としては派遣先のブルネイ・ダルサラーム大学の学生と協働でブルネイに関するフィールドワーク調査を行い、英語で書かれた資料の収集及び現地の人々へのインタビューを通して、英語による円滑なコミュニケーションができること、収集した情報を基にレポートを作成し、英語で発表できることである。終了段階で TOEIC550、TOEFL487 の取得を目指す。
2. 現地の学生と共に学ぶことを通して、相互理解を深める。到達目標としては、派遣先の学生と協働で行うフィールドワーク調査を通して、東南アジアの現状と課題についての理解を深め、相手の価値観や文化を尊重しつつ自身の意見を述べられるようになること。

ウェブ会議システムを用いた報告会を企画するとともに、レポートは電子書籍媒体で学内外に広く配布する。

## 2. 海外プログラムの実施状況とその内容

教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】 8～9月

【実施期間】 29日間

【実施場所】 ブルネイ・ダルサラーム大学 (UBD)

【参加学生数】 15名程度

【プログラムの具体的活動内容】

UBDで4技能にわかれた英語授業を毎日4時間受ける。それ以外の時間は同大学の留学支援サークル「Buddies」の学生と一緒に、モスク、水上集落、マングローブ林、サゴ工場など様々なところにフィールドトリップを行う。

宿泊はUBDの寮が提供され、それぞれ男子学生と女子学生に分かれて使用する。この寮の共同室にBuddiesの学生が来て、地元の料理を作ってくれたり、日本料理を作ったりするなどの交流も活発に行われている。

こうしたフィールドトリップや交流の経験は、何らかの発表につなげるのではなく、帰国後に制作するブルネイを紹介する単行本のコンテンツとして活かされる。

## 3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

事前・事後学習の両方が設定されている

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている

現地での学修に関する事後学習のコンテンツが用意されている

本プログラムの最大の特徴は、学生の報告書をブルネイ紹介の単行本としてまとめ、市販するという点にある。学生には、事前にこのプログラムの報告書を単行本にまとめて出版し市販することを伝えている。本プログラムでこうしたブルネイ紹介の単行本を制作するのは、日本で市販されているブルネイの観光案内本は1種類しかなく、現地に行く日本人に対して貴重な情報提供となりえるからである。また、市販される本を制作することは、学生にとっては、事前学習、現地での行動、事後の執筆という一連の活動において緊張感をもって取り組まざるを得ないという教育効果にも繋がっている。

事前学習については、全員が集合して受講する授業が3回ある。1回目が6月に開かれ課題の説明とグループ分けが行われる。1回目の後に授業外でネット会議を用いてグループごとにミーティングが持たれる。内容は①フィールドワークレポートのテーマを何にするか、②そのために何をしなければならないか、③ブルネイに行く前に本やインターネットなどで調べられることを調べる、である。2回目の授業では、各グループが調べてきたことを発

表し、前年度に派遣された学生も参加してコメントやアドバイスを行っている。

具体的なテーマは、ハラルフードについて、ブルネイの野菜・果物について、ブルネイの学生が就きたい仕事についてなど多様であったが、今年度は①ブルネイ人の日本に対するイメージ、②ブルネイの若者文化、③ブルネイに日本文化がどう受け入れられているか、に絞った。また、2018年度からは必ず現地の人へのインタビューかアンケートを実施すること必須とした。

事後学習での単行本制作は、原稿の初稿を10月末までに各自が分担して執筆し、それに対してグループのメンバーが「面白いところ」「自分も同じように感じたところ」「もっと知りたいところ」「分かりにくいところ」等の観点から相互にコメントを加えてブラッシュアップしていく形式で進められる。写真などの選定も相談しながら進め、1月に最終稿を作成して本にまとめる。執筆する分量としては、各グループでA4・3～5ページ、個人ではA4・1～2ページ程度である。他の学生のレポートを読むのが刺激的という反響も多い。最後に本の完成に合わせて報告会を実施している。

本はこれまで100部程度は一般に購入されており、ブルネイ大使館や領事館などからの問い合わせがあるなど、一定の社会的反響もある。

#### 4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

**海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある**

**プログラム設計が複数の教職員で共有され、かつその実施後に現地での活動状況や学習成果を鑑みてプログラムに修正を施し、次年度に引き継いでいける体制が確立されている**

単行本の作成とそこに示された内容と質が成果の可視化という側面を持っているが、このプログラムの成果そのものを定量的に測定する仕組みは設けられていない。

本プログラムの成績評価は、積極的参加態度10%、出発前の活動評価30%、UBDの英語授業の成績評価30%、レポートの執筆30%で評価することになっている。

プログラム自体の改善はUBDの教員からのフィードバック、学生アンケート、事後の学生面談などを通じて行っている。

#### 5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

本プログラムは卒業に必要な単位には含まれない自由履修科目として単位認定されているが、参加する学生たちは、単位認定よりも取り組み内容への関心の方が高いようである。

JASSOの奨学金給付の対象とならなかった学生に対しては、海外派遣学生旅費支援金として4万円が支給される。

#### 6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムへの参加は1～2年生が多く、派遣後に長期留学に行く学生も毎年複数名いる。2017年度に本プログラムに参加した学生の場合、14人のうち3人が長期留学に行って

いる。その点で、元々は長期留学を考えていなかったが、本プログラムがきっかけになったという効果が見られる。

## B. 学生インタビュー

### 1. 茨城大学学生 1（人文社会科学部法律経済学科 3 年）

#### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校時代に英語部に所属しており、ALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）の先生との交流を通したり、英語によるディベートに取り組んだりすることで、異なる国の人々とコミュニケーションをとる楽しさを知った。そのため、大学に入学したら海外プログラムに参加してさまざまな人々と交流したいと考えていた。

大学に入学して驚いたのは、茨城大学がさまざまな国の大学と協定を結んでいるということであった。そして入学後に参加した留学ガイダンスなどで、先生方による海外プログラムの魅力を教えてもらったり、先輩方の体験談を聞いたりしたことで、より一層海外プログラムに参加したいという気持ちが高まった。

そこで、まず 2 年次後期に、英語力を高めることを目的に 1 ヶ月の語学研修プログラム「カナダ・マギル大学英語研修プログラム」に参加した。研修の開始当初は、先生の講義がなかなか聞き取れず苦勞したが、2 週間もするとかなり聞き取れるようになった。またこの研修ではホームステイを体験し、現地の家族とのコミュニケーションを楽しめたことも英語の聞き取りの能力の向上に寄与したように思う。実際、帰国後に受けた英語の検定テストではリスニングのスコアが向上した。

#### （2）参加した海外プログラム

3 年次前期に参加した「ブルネイ・ダルサラーム大学短期英語研修」では、英語研修に加えて、ブルネイ・ダルサラーム大学に通う大学生との交流を通してブルネイの文化についても学んだ。以下が主な活動内容である。

平日は、ブルネイ・ダルサラーム大学で英語 4 技能を伸ばすための講義を受講した。英語の授業では、アクティブラーニング型授業が採用されており、あまり経験したことのない授業の形式に刺激を受けながら英語を学ぶことができた。授業が終わった放課後は、ブルネイ・ダルサラーム大学の学生とショッピング、ボウリング、そしてカードゲームなどを通じて交流を深めた。またこうした時間を活かして、帰国後にブルネイを扱った本に掲載するレポートを書くためのインタビューをバディにし、ブルネイの社会や文化への理解を深めた。

休日は、ブルネイの観光スポットを訪れたり、ジャングルに行つて現地の自然を満喫したりした。観光スポットとしては、モスクや博物館、エンパイヤホテルなどの有名な観光地だ

けでなく、現地のローカルなスポットも訪れた。ジャングルに行った際には、野生のワニやサルなどを見ることができとても貴重な体験となった。

### (3) 事前・事後学習について

事前学習では、ブルネイの文化やブルネイと日本との関係について調べた。これにより、現地で活動する時や、バディとコミュニケーションをとる時、現地社会の理解に大変役立った。

事後学習では、現地での体験と感じたことをレポートにまとめた。自分が現地で学んだことや、現地での体験を通じて発見したことおよび感じたことなどを、刊行する本の一部としてレポートにまとめることで、より深くプログラムで得たものについて考えることができた。また留学前と留学後のブルネイやムスリムに対する印象の違いを比較することで、ブルネイに対する理解もより深まった。

### (4) 成長を感じる点

本海外プログラムでは、英語だけでなくブルネイやムスリムの文化に触れることができ、自分の価値観、特にムスリムへの印象が大きく変わった。現地に行く前は、メディアを通じてムスリムによるテロなどの報道が多くあったこともあり、私にとってのイスラム教そのものへの印象は悪いものであった。しかし現地でのバディとのコミュニケーションや、大学から課せられた課題としてバディにインタビューすることなどにより、彼らは音楽やアニメなどの日本の文化に高い関心を持った親日家が多いということがわかった。そして何よりも彼らは私たちに大変優しく接してくれた。同時にこれらの経験から、メディアが発信する情報を鵜呑みにしてはいけないということも学んだ。

### (5) 満足・不満足な点

満足していることは、現地の学生と交流できたこと、自分自身の価値観を広げることができたこと、フィールドトリップでブルネイの自然や歴史的構造物などを訪れることができたことである。不満に感じたことは特にない。

### (6) 今後の学修

現在大学 3 年生で就職活動に備える必要があるため、今後海外プログラムに参加することは考えていない。就職先については地方公務員を志望しており、そこではこの海外プログラムでの体験や学んだことを活かして、地域のインバウンド政策に携わりたいと考えている。

## 2. 茨城大学学生 2（教育学部 1 年）

### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学前の異文化体験は、高校が SSH で、そこにパラグアイからの留学生が来ており、英語がペラペラで日本語も学んでいた。その生徒とかかわる機会が多かったが、異文化を感じるというよりも外国の人が普通に日本の学校で学ぶのだと思った。ただ、それで留学したいと思ったわけではない。

入学後、教育学部で英語を副専攻にしたので、英語力が必要。英語の先生が英会話をできないと説得力がないと思うし、留学経験のある先生とそうでない先生とは違うと感じた。

理系の問題の答えは 1 つだが、国語には答えがいくつもある。英語の問題は文法の答えは 1 つだけど、読解や英作文の答えはいくつもあり、両方を兼ね備えているところが好きだ。

また現在、小学校にボランティアで行っていて、そこでは学年に 3 人くらい外国籍の子どもがいる。将来、教師として働くときに、外国の文化を知っていないと、コミュニケーションを取るのも難しいし、宗教も含めて異文化を知りたいと思った。

英語ネイティブな環境で生活してみたいという気持ちもあった。

このプログラムを選んだのは、ホームステイよりも寮がいいと考えたから。ホームステイ経験者から「ステイ先の人とうまくやれないと辛い」「食事等がなじめないかも」と聞いていた。

ブルネイは時差が少ないということも理由の 1 つ。またブルネイ文化、特に宗教を知りたいと思っていた。

加えてこのプログラムは期間が短期留学の中では一番長いのが魅力でもあった。アメリカ、イギリスでの研修などは 2 週間しかなく、イギリスに 2 週間行った友人によると、ようやく耳が慣れてきたころに帰国したとのことだった。

### （2）参加した海外プログラム

プログラムの内容は、授業は午前中に 1 コマか 2 コマ＋午後 1 コマで、英語 4 技能の授業とマレー語の授業（期間中計 90 分 2 コマ）が行われた。

週に 1～2 回、まる 1 日を使ってフィールドトリップに行った。ジャングル、マングローブ林、モスク、夜市、自然の中のカフェなど。単なる観光と違うのは、派遣先のダルサラーム大学のバディの学生が詳しく教えてくれるところだった。学生という立場から詳しく教えてくれてリアルなことが分かった。バディ学生は、全部で 5 人くらい付いてくれた。

プログラムの最後にプレゼンテーションなどは行われなかった。現地で情報収集をしておいて、帰国してからレポートを作ることに集中している。

### (3) 事前・事後学習について

事前に現地で調べるテーマを決めた。イスラム教国のブルネイで、キリスト教や仏教徒がどう生活しているか、断食のときにはどうするのか、などを3人グループで話し合っただけで決めた。前年に本プログラムを経験した先輩1人も加わって、テーマについては今まで調べられていることを繰り返すのは意味がないので、今年のテーマを教えてくださいなどのアドバイスをもらった。

現地での情報収集はバディの学生から聞いたことが中心で、バディが買い物を手伝ってくれるが、その時にいろいろと教えてもらった。他の学生や一般市民へのインタビューはできなかった。

事後学習として、現地の案内本をみんなで作成し市販するということがあったので、読みやすくしようと考えた。自分で決めて調べたテーマだから、事前に想像していたよりもレポートが書きやすいと感じる。

本全体ではテーマを3つに分けて、テーマごとに分担して書いている。書いた文章をグループで読み合っているが、自分が気付かなかったことに仲間が気づいていたりするのが新鮮に感じる。自分の頭の中では整理されていないことが可視化されることで、整理できる。

### (4) 成長を感じる点

英語力については、リスニングはすごく効果があった。

帰国後の英語学習について、継続しないと耳が慣れないので毎日の継続が大事だと考え、今、TOEIC 向けのリスニングを継続している。

また日本では無宗教の人が多いが、多文化、多宗教でも共存できることや、いろんな人の考えを知ることの大切さに気付いた。

### (5) 満足・不満足な点

異文化理解の経験ができたことはとても満足している。

不満足だったことは、現地での英語の学習については満足できていない。寮で茨城大生ばかりの共同生活だったから日本人との会話がなかったせいもある。バディとの会話チャンスを逃していると思う。

### (6) 今後の学修

本学はクォーター制なので、夏休みと第3クォーターを使って4カ月の留学とインターンシップを考えている。実はこちらを先に決めていて、ブルネイはそれへのステップになると思って参加した。

### 3. 茨城大学学生 3（教育学部特別支援教育コース 1 年）

#### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

中学校のころより英語が好きで、高校 1 年生の時に旅行会社の主催する海外プログラムでニュージーランドに 2 週間滞在した。高校に入学して間もない時期であり、身につけている英語は中学生レベルであったため、プログラムでもホームステイ先でも、聞き取ることも伝えることも苦勞した。その時は何とかボディランゲージなども使ってコミュニケーションをしようと頑張った。また高校の修学旅行ではカナダに行った。これら 2 回の海外渡航で知り合ったニュージーランドやカナダの友人たちとは、現在も SNS を利用して英語でコミュニケーションをとるという関係が続いている。

こうした経験もあり、入学前から大学では海外プログラムに参加したいと考え、入学後すぐに参加できそうな海外プログラムを探した。そして、参加に必要な費用が支出可能な範囲であったこと、期間が以前参加したニュージーランドの海外プログラムよりも 1 ヶ月長いこと、派遣先がイスラム圏であり異文化体験ができそうなことなどの理由から、夏期休暇中に実施される「ブルネイ短期語学文化研修」に参加することを決めた。また学年が進むにつれて教職課程の学修も忙しくなっていくようなので、参加するなら 1 年の今しかないと考えたことも参加を決めた理由の 1 つである。

#### （2）参加した海外プログラム

1 年生の夏期休暇に参加した「ブルネイ短期語学文化研修」は、英語研修とバディを務める現地ブルネイの学生との交流プログラムで構成される。平日の日中の活動は、ブルネイ・ダルサラーム大学での語学研修で、午前中に 1 コマ（120 分）の授業があり、午後はもう 1 コマの語学研修あるいは学内やその近郊を巡るフィールドトリップで構成されていた。

また帰国後の課題としてレポートを書くためのインタビュー調査を行なった。自分はブルネイの食文化について書こうと考えていたので、バディに現地の伝統料理について教えてもらった。

土曜日および日曜日は自由行動であったり、フィールドトリップが実施されたりした。自由行動では、ブルネイ・ダルサラーム大学に海外から来た留学生と交流するサークルがあり、そのサークルの学生約 50 人がバディとなって行動を共にしてくれた。買い物や遊びに行く時には決まって彼らが車を出して連れて行ってくれた。ブルネイのショッピングモールや礼拝堂であるモスク、あるいは映画にも連れて行ってくれた。

#### （3）事前・事後学習について

事前学習では、ブルネイを紹介する本を制作するのに必要な現地で調査する内容を班ごとに検討した。この検討については、メンバーによってキャンパスが異なったり、一堂に会する時間を見出すのが難しかったりしたためオンライン会議で何度も行なった。



事後学習は、年度末にブルネイの紹介本を発売するのに向けて、自分が担当する部分のレポート作成に帰国後より取り掛かり、12月に初稿を提出した。既述の通り、自分はブルネイの食文化についてバディたちへのインタビューから得た情報、現地で撮影した写真、現地での体験をもとにレポートを書いた。

#### (4) 成長を感じる点

自分は海外プログラムを通して異文化対応力が養われたと考える。本プログラムには、これまで自分が行ったことのある欧米圏ではなくイスラム圏の国に行って、現地の人々や社会、文化に触れることを通して異文化体験をすることを目的に参加した。イスラム教とキリスト教がそうであるように、宗教がかかわる形で起きている戦争というのはお互いを知らないから起きていて、相互理解を深めれば無くなるのではと高校の時から考えていた。そして日本ではあまり良いニュースは聞かないイスラムの人々とは実際はどのような人々なのかを知ることで、自分自身にとっての異文化の人々との相互理解の第一歩を踏み出したいと考えて参加した。ムスリムであるブルネイの人々とたった1ヵ月ではあったが、時間を共にしてコミュニケーションをとり続けたことで、文化こそ異なるが彼らも私たち日本人と何ら変わらない善良な人々であるということを理解できた。

またブルネイでの英語研修と現地の人々との英語によるコミュニケーションのおかげで、英語を聞き取る能力が向上したと実感している。

#### (5) 満足・不満足な点

満足している点は、バディとのコミュニケーションを通じて、ブルネイの人々の食文化や考え方などを肌で感じる事ができたことである。

不満足な点は、大学が海外プログラムや留学を推奨する一方で、それらの日程と集中講義の日程が重なっており、海外プログラムになかなか参加しづらかったことである。

#### (6) 今後の学修

今後の海外プログラムへの参加については、できることなら参加したいが、専門科目の単位取得に支障をきたす恐れがあるので今のところは予定していない。ただ私は、自分がこれから学ぶ特別支援教育の修得に励み教員になりたいと考えている。そうした学修過程で特別支援教育が充実しているスウェーデンで行われている教育を学ぶことができたらと考えている。